

「社長になる」。小学生のころ、渡辺和喜(こ)は、将来の夢を聞かれると、迷わずそう答えた。「プロ野球選手を夢見る友人と同じように、ぼくにも目標にする人がいたんです」

# YOUR SONG

— 街角から

るように仲間三人で起業で、さまざまな経営者に会えるのが魅力だった。将来、再び起業することを踏まえての決断だ。

物心ついたときから、まなざしの先に経営者だった祖父がいた。特にまふたに残るのは正月の光景で、米の卸売会社などを営む祖父の元に取り業者らがこぞって年賀に訪れた。祖父の背中が特別

大きく見えた。◇◇「ビジネスになるぞ」。福岡大三年の九月に受けと、経営者でもある講師が称賛し、背中を押された講義「ベンチャー起業

論」。和喜が結婚式のプロデュース業に関するビジネスプランを発表する一年が過ぎたところから契約件数が増え、仕事は軌道に乗り始めたが、同

## 挫折して見えた起業の道

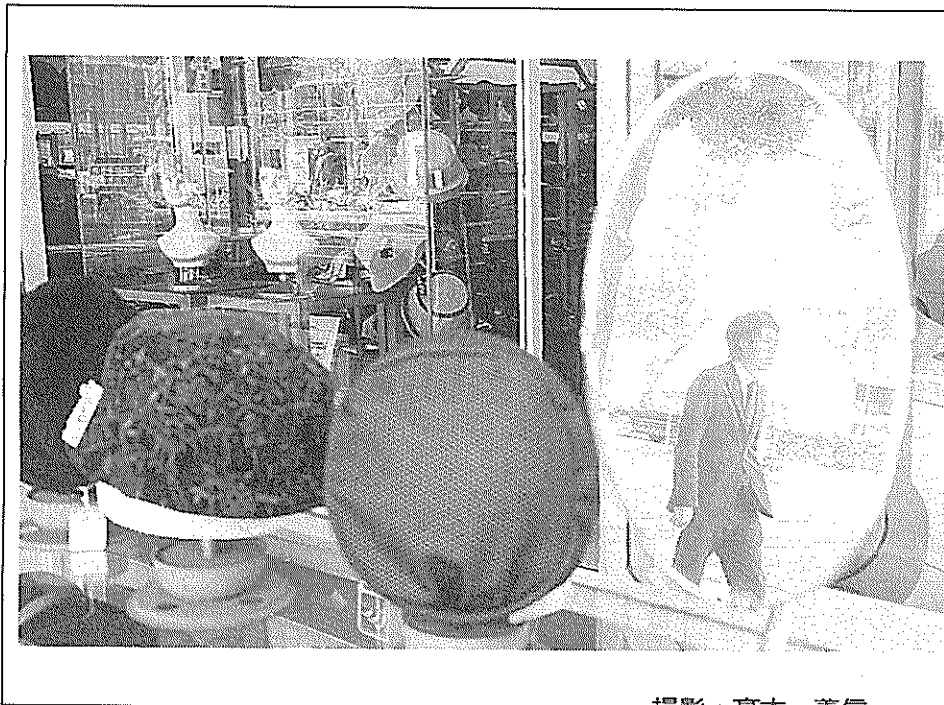
### 目指す先には祖父の背中

時に理想と現実とのギャップに悩むようになつた。オリジナルの結婚式を提案しようと会社を興したのに、こだわるほど採算がとれないことが分かったからだ。

「既存の結婚式を作るなら、ぼくらがやる意味が見えない」。悩んだ末、昨年九月に会社をたたんだ。丸二年の経営者生活。身も心も疲れ果てたが、友人には気丈にふるまっていた。

◇◇ 翌月、同市中央区大名にある企業支援会社に就職した。企業の再生、M&Aなどを支える仕事

たかぎ・よしのぶ 一  
九七五年生まれ、長崎県出身。福岡市在住。二〇〇二年から独学で写真を始め、ミュージシャンのHP用写真などを撮影。



撮影・高木 義信

和喜は今、こう考えている。「起業に挑戦したのは決して無駄じゃなかった。失敗の経験が自分の強み。祖父の背中が半分から見えてきた気がする」(敬称略(南條))